

今日のみことば

□ 8月12日(日) 歴代誌下 29章

ここにはヒゼキヤ王が主の宮を再開したと整備したことが記されている。ヒゼキヤ王は主を恐れ、主を信じる敬虔な王であった。

□ 8月13日(月) 歴代誌下 30章

ヒゼキヤ王は、二月に過越しの祭りを定め、ユダとイスラエルの人々が、主の宮に集まるように近衛兵を全国に遣わした。王の招きに集まった人々は偶像を捨て過越しの祭りを守った。

□ 8月14日(火) 歴代誌下 31章

ヒゼキヤ王はダビデによって制定されたように、主の宮の礼拝の規則を正しく行うために、祭司とレビ人の再編成を行い、彼らのために10分の1の捧げることを命じた。

□ 8月15日(水) 歴代誌下 32章

このように主を恐れる王の治世にあっても、アッシリヤ王のセナケリブの侵入ということが起こった。しかしそれは失敗に終わる。ユダの王は神に全き神に信頼をおいていたからです。

□ 8月16日(木) 歴代誌下 33章

神はマナセ王の背教を罰するために、アッシリアの捕虜として彼を悩まされたが、彼の悔い改めの祈りを聞かれた。アモンの治世については、背教以外に記されていない。

□ 8月17日(金) 歴代誌下 34章

ヨシヤ王は神を恐れる敬虔な王であった。祭司ヒルキヤが律法の書を発見した。この律法の書を重視したことは、ヨシヤ王の時代は神を畏れる時代であったことの証しと言えます。

□ 8月18日(土) 歴代誌下 35章

ヨシヤ王は過越しの祭りをを行うように命じた。旧約時代、過越し祭りが重視された時代は、信仰が燃えた時代でした。宗教改革の最盛期でした。

ろ ぼ No. 1880
2018年 8月12日
日本バプテスト 立川キリスト教会
牧師 大川 博之

ロマ 7:15

私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずにむしろ自分が憎んでいることを行っているからです。

わたしは自分のしていることがわからない。なぜなら、自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである」

パウロは、主イエス。キリストを通して「福音」をしっかりと語ってきました。私たちは本当にそれを喜びとして聞き、感謝にあふれさせていただいたのです。罪に死んでキリストと共に復活され、いのちにあふれた人としていただきました。

それで、私たちは感謝の生活にひたらせていただいているか、と言えそうでもない。それでもなお、私たちには悩みがある、とパウロは言うのです

「わが欲するところの善はこれをなさず、かえって欲せぬところの悪くはこれをなすものなり」と

のパウロの思いが、私たちのうちにあるといいます。これは厳たる事実でしょう。

「わたしは、かつては律法とかかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、わたしは死にましました。そして、命をもたらさずの掟が、死に導くものであることが分かりました。罪は掟によって機会を得、わたしを欺きそして、掟によってわたしを殺してしまったのです。」(7:9-10)と。パウロはなぜ罪に気づかされ、キリストの十字架の救いの喜びを感謝して、生きる者とされたか、思い返すのでした。

ことわざに「こわい物見たし」とあります。人はとかく、する

など戒められたことを、かえってしたくなるものです。そのような私たちを、私たちはどうしきってきたのでしょうか。ますます自分に負担をかけてきたのではなりませんか。私たちの人生は、けっしてスムーズに進むものではありません。わたしたちに救いを得させる力」に欠けているからです。

私たちは今もなお律法の束縛の中にいませんか。神さまのご命令に賛成はするけれどもそれを行うことはできない。その結果、自分の罪をいやというほど思い知らされる。そこで葛藤しているのはこの「私」です。そこで律法が、掟が幅を利かせてきます。そしてそこから罪が見えてきます。どうしてそんなことがこの私に起こるのでそうか。それは明白です。キリストイエスによる救いが、まだ、しんとうしきっていないからです。

「キリスト・イエスの血、すべての罪からわれらを清む」(ヨハネ1:7)み言葉にあります。今だにみ子の救いが、身となっていない自らを見つめさせていただくことです。パウロは言うのです「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。」(7:23-25)

しかしここから私たちを救いだ沿て下さるお方がおいです。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。」

もなおそこに到達し得ない自分にいらだちを覚え

聖書の学び・祈祷会 》

創世記24:1-27 アブラハムの僕の祈り

約束の世継ぎであるイサクの結婚は、アブラハムの私事ではありません。それは神さまに関する重大事です。そこでアブラハムは忠実に努めてきた老家令にその任を与えました。その条件は神を信じる者であること、その娘を約束の地に連れてくることでした。

老家令（僕）には、アブラハムの願いは無理難題と言えるものでした。彼はこの任務を与えられるや、祈り、またその任につくときも祈りました。祈り終わると、はたせるかなその祈りは聞かれていました。

祈りはなかなか聞かれないものと、私たちの思いの中にありませんか。神さまはイサクに最上の嫁を備えていてくださいました。祈る前から備えられていたのです。そこで私たちの祈りとは何なのでしょう。



Read God's Word.

次週の聖書・説教

ロマ8:1-30

最高の勝利